患者さんと丸子中央病院をつなぐココロとカラダのイキイキマガジン

Marukko
まるっこ

Maruko Central Hospital Public Relations Magazine

ご自由にお持ち帰りください。

Free

08

2018. 春号

feature articles
特集
継

【丸子中央病院の理念】 本院は、質の高い医療の提供を通じて地域のしあわせ創りに貢献します。

私のおもい Vol.8

「支え合うということ」

～ (医)丸山会のロゴは人と人が支え合っている姿をデザインしたものです ～

丸子中央病院 診療技術部長
春原 勝芳

我家には91歳の母親がいる。週5日通っている老健施設「ケアまるこ」のデイケアの皆さんには本当に心から感謝している。外出する機会、入浴する機会、話をする機会、毎日の出会いが母を支えてくれている。デイケアから帰ってくると翌日着るものを妻と楽しそうに選んでいる。物持ちがいいので服の数は私より多い。私は少し照れくささもあり優しい言葉はあまりかけないけれど、時々大好きな漬物とお茶を部屋に持って行く。すごく喜んでくれる。自分ではできなくなった母の代わりに毎年野沢菜も漬けている。今年は手を合わせて「うれしい」と拝まれてしまった。

皆、自分のことは最後まで自分でしたいと思うのだろうが、病院に勤めていると難しい現実も目に入ってくる。そんな時、我が身を患者さんに置き換えてみることがある。忙しい時でも優しく患者さんや利用者さんに接してくれているスタッフの皆さん、手前味噌だが本当に素晴らしいと思う。自然に顔も心もほころぶ。

病院のホームページを開くと「ふと、心と足が向かう場所へ。ぬくもりある〝地域に根ざした病院。」という文字が目にとまる。病院の新築移転から5年目に入り、日々の診療や様々なイベントを通して、地域の皆さんに親しまれ支え合っていける「ぬくもりある地域に根ざした病院」の姿が見えてきた。1人と1人、家族、職場、地域社会、人と人が支え合える所にはぬくもりのある強い力が必ず生まれると信じている。

イラスト/森田 宏子

Contents

特集 継
二百年の時をうけつぐ～ 飯島商店の継承
うけつぎ、つづけ、ひきうけ、つぐままに 1～4

連載第2回
丸子電鉄から読み解く― 丸子の歴史
消えた下丸子駅の謎❷ 5

トピックス
Marukko TOPICS 6

二百年の時をうけつぐ～ 飯島商店の継承

うけつぎ、つづけ、ひきうけ、つぐままに

みすゞ飴と言えば、長野県のみならず全国に名をとどろかせる定番商品となっています。この商品を作っているのは、上田駅前に威容のある店構えの飯島商店。定番のみすゞ飴以外にもジャムや果物の冷菓など、オリジナリティあふれる商品を展開しています。その歴史と商品に込めた思いを、飯島新一郎副社長にお伺いしました。

穏やかな表情で貴重なお話を丁寧にしていただいた、飯島新一郎副社長。

飯島商店の前身は、「油屋」という屋号で穀物商でした。今から200年以上前、当時は柳町（上田市）の北国街道に面した場所に店を構えていました。その後、信越線の開通を見据えて、現在の店舗の位置に移転しました。今の目で見れば駅前の好立地で、当然の移転のように見えるかもしれません。しかし、当時は大きな賭けだったと推測します。当時の北国街道は栄えていましたし、鉄道がどのくらい影響を及ぼすものか想像できなかった時代です。

しかも千曲川に近い低地のため、川の氾濫や洪水が起こってもおかしくない場所です。忌避されやすい場所に移転を決めたのは、四代目社長である才治の英断だったと考えています。

その息子の五代目社長、新三郎は大変なアイデアマンで、現在の飯島商店の基礎を築いた人物です。

飯島新三郎（1879年～1961年）

当時の水飴製造現場

柳町から移転した当時の店舗

1900年、深川で洪水が起こります。深川にも取引のある穀物商だった新三郎は、水浸しになり食べられなくなったお米を買い取り、水飴製造に着手します。

油屋のあった北国街道を北に行くと、越後高田には老舗の水飴屋が数多くあり、大変栄えていました。おそらく新三郎はその繁盛ぶりを以前に見ており、「水飴は売れる」との思いがあったのではないでしょうか。新三郎が作った水飴は、森永キャラメルの原料に使用され、飯島商店を大いに潤しました。しかし、新三郎はこの頃すでに次の展開を考えていました。「下請けだけでは、キャラメルの販売量に左右される。価格競争に巻き込まれる可能性も高い。何か店舗で売り出せる商品を作りたい。」そう考えた新三郎はまず水飴を寒天で固めた「翁飴」を作り販売します。ただ、翁飴は新潟県高田地方の名産で、自分たちの創作したものではありません。

単なるまねではなくオリジナルの商品を作りたい、その思いが、翁飴に果物を入れた「みすゞ飴」の誕生につながりました。

みすゞ飴のこだわりは「果物本来の味にこだわる。火を通してこそ真価を発揮する果物を選ぶ。」ということです。この2つのことは見矛盾に見えるかもしれませんが、真意はこうです。

例えば、いちごは品種改良により今でこそ甘くてそのまま食べられますが、昔は練乳をかけたりミルクに入れたりしないと食べられない人も多い、というくらいすっぱい果物でした。昔のすっぱいいちごは、ジャムになってこそ真価を発揮します。

みすゞ飴の考え方も一緒です。みすゞ飴の中に入れる果物は、火を通しておいしいと感じられるものを選定しています。

日本ではとかく加工用の果物というのは、傷のついた売れないもの、生食できる物より下のものと考えがちですが、当店は、生食しておいしいものと加工しておいしいものは全くの別物と考え、加工しておいしいと思われる品種のみを追求しています。

その代表的な果物が三宝柑（さんぽうかん）です。和歌山県が産地の三宝柑は、「はっさく」や「いよかん」などに押されて、昭和50年代には生産をやめる寸前までいったことがあります。田辺（和歌山県）を訪れてその危機を知った社長の浩二は、三宝柑を大量に買い取る約束をしました。大変な賭けでしたが、その香りや風味は他に代えがたいものだとの直感があったのです。現在、三宝柑は、みすゞ飴にもジャムにも使われており、飯島商店を代表する人気食材となっています。

飯島商店の魅力は、商品にとどまりません。上田本店の西洋風の堂々とした威容の外観、豪華な中にもなんとなく懐かしく感じられる内装も魅力にあふれています。

feature articles 特集 継

ともとの商店のあった北国街道沿いの柳町は、江戸時代の趣を残した古い商家です。しかし、店があった場所はその形跡もありません。

古い店構えに美しさを感じていた先代社長の春三は、現在の飯島商店の建物は何としてでも残したいと考えていました。周りの建物が近代化していくとともに、いろいろな人たちが改築・新築を勧めてきましたが、聞く耳を持ちませんでした。2004年にこの建物が文化財になって以降は賛美されていますが、残し、守ることに要した労力は並大抵ではなかったでしょう。この建築を残してくれたことに感謝しています。

そして店員の皆様の接客には、現代ではほとんど経験できないような「たおやかさ」があります。接客で心がけていることを小井土悦子営業第一課長にお伺いしました。

優しいまなざしで、しなやかなふるまいが、印象的だった小井土悦子営業第一課長。

こうして守り繋いでまいりました大正建築の当店舗ではドアマンがお客様のご来店をお待ち申し上げております。いつお越しいただいても失礼のないよう常に外にも気を配りながら入り口でお客様をお迎えし、お見送りをいたしております。ドアをお開けした、その瞬間からこの飯島商店の空間を体感いただき、その中でゆっくりとお買いものをしていただけたらなによりでございます。

接客につきましても、その伝統を守り、受け継いできておりますが建物同様、今後も繋いでいかなければと考えております。私自身も飯島商店における接客とは何かを入社以来、長年指導を受けてまいりました。それは一言では申し上げられませんが、地元の皆様や全国からご来店くださる多くの方々に日々感謝申し上げ、こちらでくつろいでいただけるよう、いつも心に銘じ、心がけていくことだと思っております。

古地図に残る江戸時代の飯島商店

■飯島商店歴史年表

西暦年	できごと
1816	屋号「油屋」で創業
1888	信越線開通。上田駅前の現在の位置へと店を移転
1900	東京深川近郊で洪水。水飴製造に着手
1912	みすゞ飴の誕生
1919	株式会社設立
1924	飯島商店本社ビル完成
1980	本社ビル(出荷所)を店舗に

…… ❶忠八 ― ❷才治(初代) ― ❸才治(二代目) ― ❹才治(三代目) ― ❺新三郎 ― ❻春三 ― ❼浩一(現社長)

飯島商店上田本店に一度でも足を運ばれた方はお分かりになるでしょうが、店内には特別な時間が流れています。外観、内装、商品のディスプレイ、サービスが混然一体となり、私たちは別世界に迷い込んだような気持ちになります。飯島副社長は「文化財、みすゞ飴、サービスを守っていく」とインタビューの中で明言されました。上田駅前の一画は、今後も私たちを魅了してくれそうです。

ドアマンの藤沢さんに迎えられることで、現在から過去へタイムスリップした異空間へ引き込まれるかのような胸の高なりを感じられる。

みすゞ飴本舗　株式会社飯島商店
上田本店
〒386-0012 長野県上田市中央1-1-21
通信販売・各種問合せ：0268-23-2150
営業時間：10:00～18:00
定休日：1/1、12/31午後

上田丸子電鉄から読み解く―丸子の歴史

（連載第2回）

消えた下丸子駅の謎②

かつて丸子町（現・上田市）は製糸産業が盛んで、物流・旅客両面で人の動きの多いところでした。このため、長野県内でも早い時期に鉄道が敷設された場所です。丸子の鉄道の歴史を振り返ることで、丸子の歴史をさかのぼります。

取材協力：両角辰文 様
桂木恵 様
写真提供：奥村栄邦 様

丸子鉄道、上田丸子電鉄丸子線、鐘紡丸子工場に関する情報を募集いたします。
皆様の情報をお待ちしております。
連絡先
丸子中央病院　経営企画課
【 電話：0268-42-1136 】

「丸子鐘紡駅」の誕生は「無駄を省くため」？

現在丸子中央病院のある敷地は、かつて鐘紡（現クラシエ）工場があった場所です。昭和4年の世界恐慌以降、旧丸子町の製糸工場は次々と閉鎖されます。町は鐘紡の誘致運動に乗り出し、奇しくも下丸子駅が「信濃丸子駅」に改称（前号参照）された昭和10年7月3日に鐘紡丸子工場の竣工式が行われました。工場建設とともに信濃丸子駅から引込線（鐘紡工場への貨物専用線）も作られました。これにより町の景気は一時的に刺激されましたが、それも束の間、戦時経済統制と戦災により絹紡の設備稼働は昭和12年～13年を100とすると昭和20年には16.4にまで落ち込みます。

終戦後の昭和25年、朝鮮戦争勃発を契機に繊維産業が復活します。昭和24年から昭和26年の2年間で「鐘紡の繊維生産は2倍以上に伸び」（『鐘紡百年誌』）、丸子工場の稼働も一気に上がります。景気の良さを示すエピソードとして、当時の丸子実業（現丸子修学館）高校の教務日誌には、「丸子工場より1万円（現在の価値で60～70万円）を運動会に寄付いただいた」旨の記載があるそうです。

活況のさなかの昭和25年12月9日、北信毎日新聞（現在は廃刊）は次のように伝えています。「信濃丸子駅へ鐘紡宛の荷物が各方面から到着するので此の無駄を除去する目的から（中略）信濃丸子駅は『丸子鐘紡駅』と改名認可となり12月8日から信濃丸子駅の名は消え去ることとなった」

企業名のついている駅は現在もありますので改称自体は理解できます。しかしこの記事では「信濃丸子駅」という駅名ではどんな「無駄」があるのか読み取れません。「丸子鐘紡駅」に改称することでどんな「無駄が除去」され、どんなメリットがあったのでしょうか。

「引込線から同駅へさかんに貨車が往復し、大量に増えてゆく会社宛の荷物に『信濃丸子駅』『丸子鐘紡株式会社』と表記するより、『丸子鐘紡』と書く方がより利便性が高いと鐘紡側は考え、駅名変更を電鉄側に働きかけたのではないか」と上田小県近現代史研究会の桂木恵さんは推測します。信濃丸子駅は朝夕の通勤客も含め、事実上「鐘紡の駅」として機能していました。「丸子鐘紡駅」への改称は、鐘紡側はもちろん、貨車を扱う上田丸子電鉄側にも大きなメリットがあったと考えられます。

鐘紡工場は平成8年にその幕を閉じましたが、工場跡地は公的施設やショッピングセンターなどの複合的施設「まるこベルシティ」となりました。そしてかつての引込線終点付近には、丸子中央病院の保育園が完成しました。引込線完成当時とはまた違った賑わいのある一角となることでしょう。

上）鐘紡への引込み線の踏み切り
右）引込線地図 昭和32年

『温泉の秘密』

筆者の飯島裕一さんは、信濃毎日新聞で長年医療や健康について才筆をふるっています。その筆者が、全国各地の温泉に入り、取材し、まとめたのがこの本です。

医療ジャーナリストの顔を持つだけに、温泉の成分・効能や衛生面、体に良い温泉の入り方など、医師や専門家の知見をもとに医学的に分析されています。

また、温泉の効用だけにとどまらず、それぞれの温泉の歴史や伝説、周辺の文化などを、関係者から丹念に取材されています。温泉それぞれに特徴があり、読後は長野県全県・日本全国・ヨーロッパまで旅した気分になります。

実は筆者の飯島さん、飯島商店の飯島浩一社長と「いとこ」というご関係です。分野は異なりますが、長野県の良さを全国に発信しよう、との志は同じだと感じ入りました。

『温泉の秘密』
(2017.2)
飯島 裕一（著）
発行:海鳴社

丸子中央病院内保育園「あったかステーションわくわく」が完成いたしました。

「連載　丸子の歴史」にもありますとおり、丸子中央病院内敷地内に保育園が、2017年12月に完成しました。3歳未満のお子さんを対象にした保育園で「あったかステーションわくわく」と名付けました。上田市で初めてとなる企業主導型保育施設となります。

12月23日の内覧会には50組のみなさまがお見えになり、新しい建物の雰囲気を感じていただきました。

この保育園は、地域のみなさまの子育てと仕事の両立を支援するため、病院職員以外の方もご利用いただけます。入園には条件がございますので、見学や入園ご希望の方は下記連絡先までまずお問い合わせください。

●連絡先：0268-43-4098（平日9:00～17:00）

医療法人丸山会は、地域のしあわせ創りに貢献する取り組みを今後も実施してまいります。

12月25日の
竣工式の様子

編集後記

飯島商店の200年以上の歴史を取材させていただくことで、上田という土地の歴史の彩り、深みを改めて感じさせられました。取材後、北国街道の中でもひときわにぎわっていた柳町を散歩してみました。昔の風情を残した雰囲気に、魅力いっぱいのお店が軒を連ね、一瞬の「時を忘れる旅」を満喫できました。

旧北国街道でも
ひときわにぎわった柳町

●発行
特定医療法人 丸山会 丸子中央病院
経営企画課 広報係　Marukko（まるっこ）制作委員会
〒386-0405 長野県上田市中丸子1771-1
●編集・進行
北澤 淳一（丸子中央病院）
安藤 あすか（丸子中央病院）
上平 徳男（丸子中央病院）
●アートディレクター
五木田 忠之（MOKUBA.CO.,LTD.）
●デザイン
MOKUBA.CO.,LTD.
●お問い合わせは…
丸子中央病院 経営企画課 広報係
Marukko（まるっこ）制作委員会まで
TEL.0268-42-1111
月曜日から金曜日、10時～17時（祝日・休日・年末年始を除く）